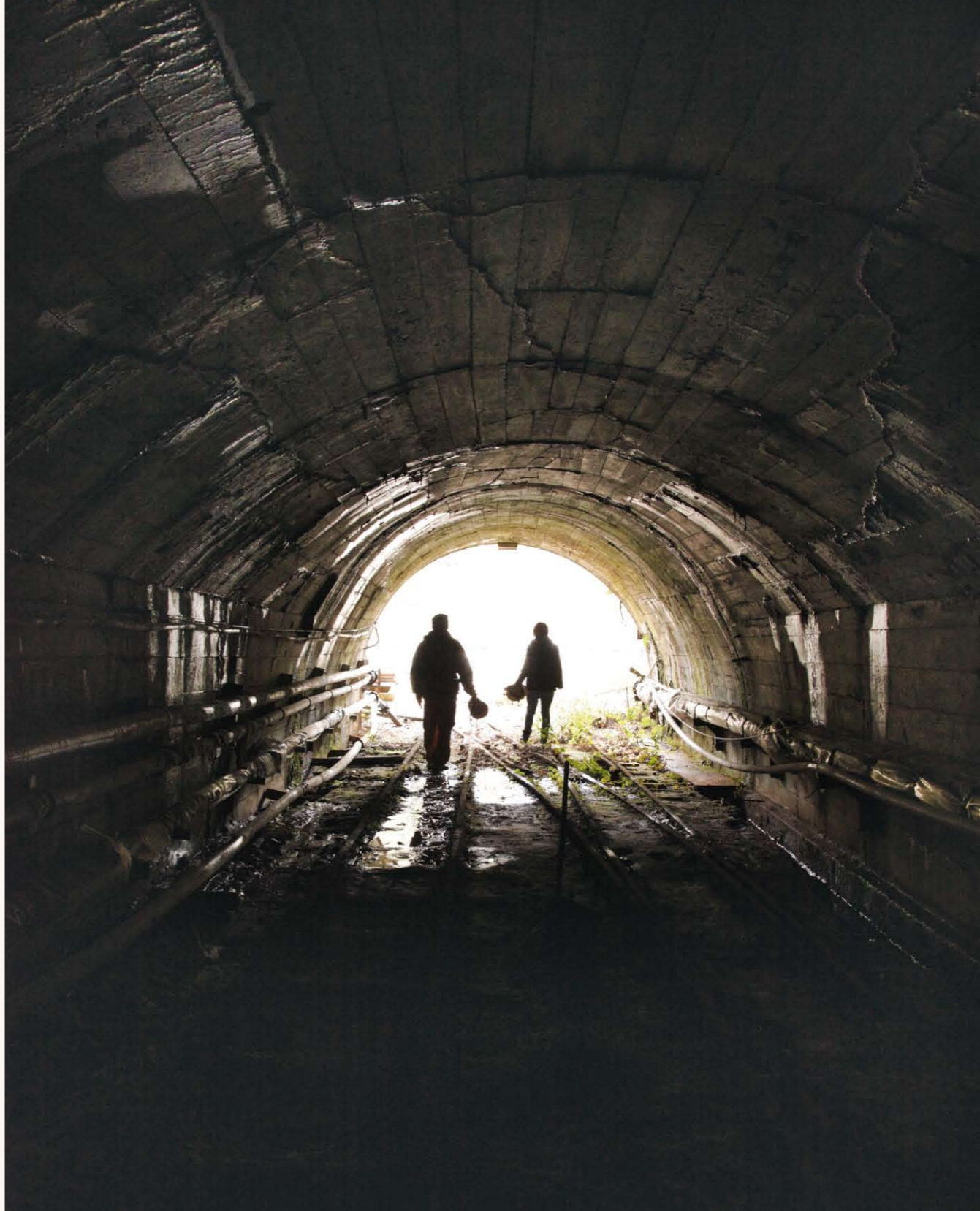


地中探検にワクワク！紀州熊野の旧鉱山。

いしかわみなと
石川源

グラフィックデザイナー！写真家
07年よりすぎもと農園のデザイン写真を担当



農園のある御浜町のとなり、熊野市紀和町は30数年前まで鉱業の町として栄えていました。その「紀州鉱山」は、昭和53年（1978）の閉山まで日本屈指の採掘量を誇った銅鉱山（他に金、銀、鉛も出たと言います）坑道の総延長は、なんと320kmもあったと言います。驚きじゃありませんか。それは、東京から琵琶湖までの距離にあたるんです！

取材に「熊野市紀和鉱山資料館」を訪れました。いろいろなお話が聞けたのももちろん、撮影のベストポジションにも案内していただきました。

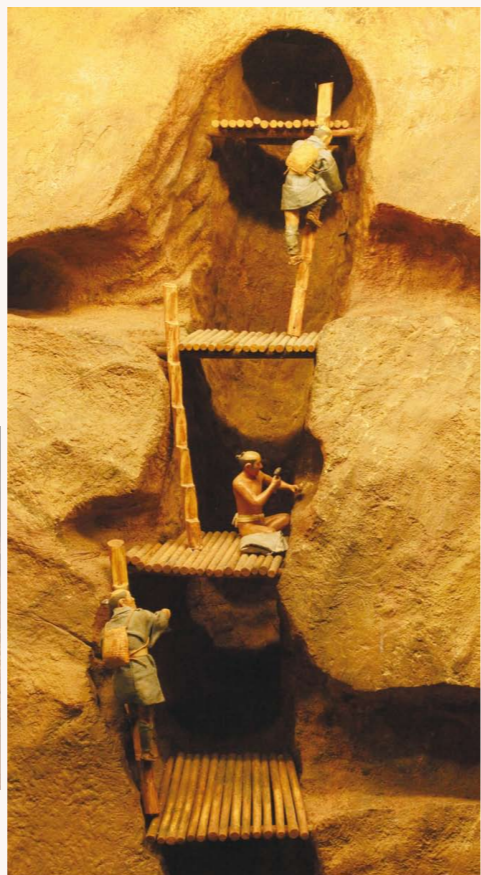
上の写真は、全坑道の起点「号隧道」の入り口です。（許可のもと）ほんの10m程ですが入って、奥を覗きました。とりあえず

真つ直ぐに続いていると思われるトンネルは数10m先でもう闇に溶け込んでいます。この闇の先に320km（総延長）も続いていると思うと、そりゃもう、くらくらと来ちゃいました。

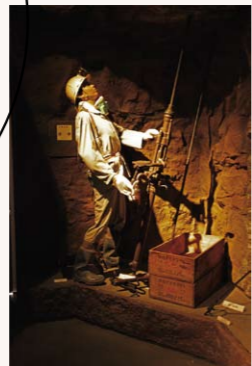


残鉱石の堆積場が、探鉱の体験スポットになっていました。砕石用のハンマーを借りて、金が出ないか銀は出ないかと、カツンカツン。うまく石の目にヒットするとバカッと割れます。金銀はザンネン。細かい銅の結晶は見つけました。

取材協力：「熊野市紀和鉱山資料館」
tel.0597-97-1000
http://kiwa.is-mine.net/



右：江戸時代の堅坑道の様子のジオラマ。真ん中の人はノミと鑿で採掘しています。（ちなみに人の大きさは15cm程度、動いています。）上下の二人は鉱石を地上に運んでいます。下：こちらは近代、空気削岩機で採掘中の実物大坑夫、足下にはダイナマイトの箱があります。ガガガという音もリアルです。いや〜、すばらしいジオラマ。ほれほれです。ページ中央・坑内事務所にあった看板、当時の現物です。



ここ紀和町周辺は、古くから小さな鉱山が点在している場所でした。その歴史記述を辿って行くと、これまた驚くことに西暦700年代に朝廷に金銀を献上した事や、745年の奈良の大仏の建立にこの銅や金が使われたと記されています。江戸時代にはかなり盛んに、明治になって近代日本の建設を担ってより増産。昭和に入ると大手の参入

何処でも〇〇館なるものがあると入ってしまう私が（偉そうに言うのなら）同館はこじんまりしているとは言え、なかなか大したものなんです。展示の仕方が良く、とりわけジオラマが素晴らしいのです。ミニチュアはもちろん、原寸の人体は生きているかのよう



最後に訪れたのが選鉱場跡、鉱石を選別する施設です。一日に1000トン、東洋一の処理量だったのだそうです。下が創業当時の古い写真。山の斜面に階段状に13階層、引力を利用して上から処理したのでしよう。上が現在、コンクリートの梁だけ残っています。

次は、近代鉱山を支えた「紀州鉱山」としてピークを迎えたのです。最新技術を導入した山は、近代鉱山のモデルケースとして他の鉱山会社からの見学研修が絶えなかったそうです。そんな順風満帆だった山も60年代の国際相場の暴落により採算の悪化。78年には、とうとう閉山の憂き目を見たのです。さてここまでは、鉱山の背景のお話し。次は、もしこの駄文に触発されて「ぜひ行ってみたい」と思った方の為に、現在訪ねて「何が実際に見られるの？」に、掘り下げて行きましょう。



いしかわみなとの「すぎもと農園」界隈 紀州熊野レポート その11

まずは「熊野市紀和鉱山資料館」を訪ねてください。国内外を問わず

次は、近代鉱山を支えた「紀州鉱山」としてピークを迎えたのです。最新技術を導入した山は、近代鉱山のモデルケースとして他の鉱山会社からの見学研修が絶えなかったそうです。そんな順風満帆だった山も60年代の国際相場の暴落により採算の悪化。78年には、とうとう閉山の憂き目を見たのです。さてここまでは、鉱山の背景のお話し。次は、もしこの駄文に触発されて「ぜひ行ってみたい」と思った方の為に、現在訪ねて「何が実際に見られるの？」に、掘り下げて行きましょう。

話題に終始したので最後に清涼剤。資料館で見せていただいた見事な「螢石」。副産物(?)としてここで出たものでしょうか。ブラックライトを当てると、ご覧のように怪しく輝きました。きれいでしょ。そろそろワクワクの地中探検を終えて地上に戻ることにします。



螢石（ほたるいし）：ハロゲン化鉱物の一種。主成分はフッ化カルシウム。紫外線を照射すると紫色の蛍光を発する。古くから製鉄などにおいて融剤として用いられてきた。

まずは「熊野市紀和鉱山資料館」を訪ねてください。国内外を問わず

次は、近代鉱山を支えた「紀州鉱山」としてピークを迎えたのです。最新技術を導入した山は、近代鉱山のモデルケースとして他の鉱山会社からの見学研修が絶えなかったそうです。そんな順風満帆だった山も60年代の国際相場の暴落により採算の悪化。78年には、とうとう閉山の憂き目を見たのです。さてここまでは、鉱山の背景のお話し。次は、もしこの駄文に触発されて「ぜひ行ってみたい」と思った方の為に、現在訪ねて「何が実際に見られるの？」に、掘り下げて行きましょう。

話題に終始したので最後に清涼剤。資料館で見せていただいた見事な「螢石」。副産物(?)としてここで出たものでしょうか。ブラックライトを当てると、ご覧のように怪しく輝きました。きれいでしょ。そろそろワクワクの地中探検を終えて地上に戻ることにします。

螢石（ほたるいし）：ハロゲン化鉱物の一種。主成分はフッ化カルシウム。紫外線を照射すると紫色の蛍光を発する。古くから製鉄などにおいて融剤として用いられてきた。